

接続する助詞のアクセントについて

木部, 暢子
純真女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/10509>

出版情報 : 文献探究. 10, pp.63-72, 1982-09-15. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

連接する助詞のアクセントについて

木部 暢子

一

助詞のアクセントについては、以前に北九州市方言を例として述べたことがあった(参考文献①)。それは主として、前接する自立語に対して助詞がどのように付くかであって、助詞同士が連接する場合のアクセントについては、簡単に触れたにすぎなかった。その後、アクセントと文法との関係を見ていくうちに、いくつかの助詞が連接する場合のアクセント、また助動詞と助詞が連接する場合のアクセントを考えねばならないということに気がついた。

名詞に対して従属式接続をする助詞も、他の助詞に接続する場合には低接式とすることがあり、また動詞に続く場合にも低接する傾向が強いという事実がある。これは現代東京方言に限らず、他の方言でも一般的に見られる傾向であるようだ。このような現象は、助詞のアクセントや性格を考える上で、非常に興味深い問題である。また、文法的な問題としては、

私にはそんなことはできません。

私からよりも、あなたの方がいいのではありませんか。

という文において、このような助詞の接続をどのようにとらえるのか、「私にはは」ととらえるのか、「私にはは」ととらえるのか、そ

れとも「私にはは」ととらえるのが問題とせらう。

本稿では、このように助詞が接続する場合の取り扱いとその意義を、アクセントの面から考えてみたいと思う。対象とするアクセントは、

北九州市方言(筆者自身の内省に依る)

東京方言(三省堂『明解日本語アクセント辞典』第二版に依る)の二つが中心とせらるが、随時、他の方言を参照することにする。ただ、付属語のアクセントとせらると諸方言の体系的な研究はあまり進んでおらず、助詞の接続がどのようなアクセントにせらるか、ということになると、比較すべき資料はほとんど出ていない。具体的には、参考文献にあげたものに限らるることになるだろう。

アクセントの記号は、わかりやすくするために、高い部分に右傍線を引いて示すことにする。また、下がり目に「」の記号を用いる。

二

北九州市方言の助詞の概略は、前稿(参考文献①)で述べたが、ここにもう一度簡単に示すと次のとおりである。ただし、前稿のものを拍数ごとに整理しなおしてある。

一 拍助詞

三拍助詞

- (a) ノ〔格助詞〕
- (c) ガ、オ、ニ、デ、エ、ト〔格助詞〕
- ト、カ、ヤ〔並列助詞〕
- ワ、モ〔係助詞〕
- ヰ、ド、セ、カ〔終助詞〕
- サ、ネ、ナ、ノ、ヨ〔間投助詞〕
- テ〔接続助詞〕
- (e) カ、ヤ、ノ〔並列助詞〕
- ノ、ナ〔禁止〕、ヰ、ド、セ、カ、フ〔終助詞〕
- ノ〔準体助詞、準副体助詞〕
- バ、チ、ト、シ、カ、ガ、ケ〔接続助詞〕
- ニ拍助詞
- (a) ズツ、トモ〔副助詞〕
- ツツ〔接続助詞〕
- (c) カラ〔格助詞〕
- (d) タケ〔副助詞〕
- タラ〔接続助詞〕
- (e) ヨリ〔格助詞〕
- ヤラ、ナリ、ダノ、トカ〔並列助詞〕
- ホド、マデ、ナド、トカ〔副助詞〕
- コソ、サエ、デモ、シカ〔係助詞〕
- ノデ、ノニ、カラ、ナラ、ケド〔接続助詞〕

つまり

- (a) バカリ〔程度〕、ナカラ〔副助詞〕
 - ナカラ〔接続助詞〕
 - (d) バカリ〔限定〕〔副助詞〕
 - (e) グライ、ナンカ、ナンテ、ダツテ〔副助詞〕
 - ケレド〔接続助詞〕
 - カシラ〔終助詞〕
 - 四拍助詞
 - (a) バツカリ〔副助詞〕
- (注 *印はニカ所に亘つて出てくるもの)
- 北九州市方言の助詞を(a)~(e)の五つに分類したのであるが、それ
 をの具体的アクセントは次のとおりである。
- | | | | | | |
|---|------|--------|------|-------|-------|
| 風 | カセノ | カセバカリ | カセガ | カセダケ | カセヨリ |
| 山 | ヤマノ | ヤマバカリ | ヤマガ | ヤマダケ | ヤマヨリ |
| 雨 | アメノ | アメバカリ | アメガ | アメダケ | アメヨリ |
| 車 | クルマノ | クルマバカリ | クルマガ | クルマダケ | クルマヨリ |
| 男 | オトコノ | オトコバカリ | オトコガ | オトコダケ | オトコヨリ |
| 心 | ココロノ | ココロバカリ | ココロガ | ココロダケ | ココロヨリ |
| 毎 | イチゴノ | イチゴバカリ | イチゴガ | イチゴダケ | イチゴヨリ |
- 行く イキチカラ イッテ イクダケ イクノデ
- 読む ヨミナガラ ヨンデ ヨムダケ ヨムノデ

- (a) 接尾辞式接続。(c)に大たい同じだが、尾高型の語に接続すると語末の核を消去する。
- (b) 接尾辞式接続。前接自立語の核を消去し、助詞自身が核を持つ。

(c) 従属式接続。自立語の式を変えずに付き、助詞自身は核を持つ。
たない。

(d) 従属式接続。(c)に大たい同じだが、助詞自身が核を持つ。
(e) 低接式接続。助詞自身が直前に核を持つ。

これは前接する自立語との関係からの分類で、助詞が連続する場合のアクセントはまだ考慮に入れていないのであるが、まず最初に北九州市方言の助詞の主な特徴を見ておくことにしよう。

北九州市方言では、(b)が多く、助詞が低接する傾向が強い。それは二拍助詞で著しく、東京方言では従属式(d)に分類される二拍の助詞のほとんどが、北九州市方言で(e)になっている。ただし東京方言でも、これらの助詞が用言に接続する場合には、北九州市方言と同様、低接式にびるのが普通である。一拍助詞にも低接傾向が見られ、準体助詞は、

ワタシノホン	オバサンノウチ
ワタシノ(私の物)	オバサンノ(おばさんの物)
ミセノシナモノ	アシタノアサ
ミセノ(店の物)	アシタノ(明日の事)
キノーノコト	
キノーノ(昨日の事)	

のように、格助詞のノとはアクセント的に区別される。三拍助詞でも、グライ、ナンカ、ナンテ、ダツテなど、東京方言では(d)に分類されるものが、北九州市方言では(e)に入っている。

三

助詞がいくつが連続する時に、そのアクセントはどのようになり、また問題点はどのようになっているのか。北九州市方言を例にとつて具体的にみていくことにしたい。

その前に、いくつかの助詞が連続する時に、それをどのよう基準で見えていくのがよいかの問題がある。私は拍数を基準にして見ていくのがよいと思う。ひとつには、諸方言を比較する時に最も客観的基準たりうるからであり、またひとつには、助詞のアクセントには拍数が大きく関係しているからである。基本アクセントということも、外来語のアクセントや非日常語のアクセントなどの時によく言うが、その基本アクセントは外来語や非日常語に限らず、助詞には助詞の基本アクセントのようなものがある。例えば東京方言では一拍助詞は無核の従属式が基本型、二拍助詞はマイナス二拍目に核のある従属式が基本型、三拍助詞はマイナス三拍目に核のある従属式が基本型、というように拍数によって助詞のアクセントがある程度決まってくるのではないかと思っている。北九州市方言では、一拍助詞は無核の従属式、二拍助詞は低接式、三拍助詞はやはり低接式が基本型ということになるか。

それでは、拍数ごとに整理した、助詞の接続する場合のアクセン

トを示すことにしたい。なお本稿では、間接助詞と終助詞とは考察の対象から除くことにした。

〔1〕 一拍助詞十一拍助詞

① ニワ、デワ(ジャー)、トワ、ニモ、デモ、エモ、トモ、

オモ(㉔)の助詞+㉔の助詞)

② ノガ、ノニ、ノオ、ノデ、ノト、ノワ、ノモ(㉕)の助詞+㉕の助詞)

③ トノ、デノ、エノ(㉖)の助詞+㉖の助詞)

北九州市方言では、この三つは

① カゼニ ワタシニ ヤマニ アメニ(雨)

② カゼニワ ワタシニワ ヤマニワ アメニワ
ワタシノ オハサンノ
ワタシノガ オハサンノガ

③ カゼト ワタシト ヤマト アメト
カゼトノ ワタシトノ ヤマトノ アメトノ

のようになる。これらは東京方言では、

① カゼニワ ② ワタシノガ ③ カゼトノ

の如く、助詞の間に核が来る。上野善道氏に依れば、松江市方言や富山県氷見市方言でも東京方言と同じような型になるそうである(参考文献③、④)。上野氏は「無核の付属語が連続すると、その間に核が挿入されるという規則」(参考文献④)を立てておられる。北九州市方言では②は前の一拍助詞ノがもともと低接式の助詞だから、

東京方言などの場合とはやや事情がちがうが、①と③は多少問題である。①も③も前の一拍助詞は単独では従属式接続をするのに、後に他の一拍助詞が続くと、とたんに低接式に変わるからだ。北九州市方言では、東京方言のようが

(㉔) 無核の助詞が連続すると、その間に核が挿入される。という規則ではなしに、

(1) 無核の一拍助詞に一拍助詞が接続すると、前の無核の助詞は直前に核を持つ型に変わる。という規則を立てねばならない。

〔2.1〕 二拍助詞十一拍助詞

④ カラガ、カラオ、カラニ、カラデ、カラワ、カラモ(㉗)の助詞+㉗の助詞)

⑤ カラノ(㉘)の助詞+㉘の助詞)

⑥ ズツガ、ズツオ、ズツニ、ズツデ、ズツフ、ズツモ(㉙)の助詞+㉙の助詞)

⑦ ダケガ、ダケオ、ダケニ、ダケデ、ダケト、ダケワ(㉚)の助詞+㉚の助詞)

⑧ ヨリワ、ヨリモ、ホドワ、ホドモ、ホドニ、ホドデ、マデワ
マデモ、マデニ、ナドワ、ナドモ、ナドニ、ナドデ、マデワ

⑨ ホドノ、マデノ、ナドノ、トカノ(㉛)の助詞+㉛の助詞)

④ ミチカラ ミチカラガ ワタシカラ ヤマカラ ソラカラ
⑤ ミチカラノ ワタシカラノ ヤマカラノ ソラカラノ

⑥ ヒトリツツ フタリツツ サンニンツツ
 ヒトリツツが フタリツツが サンニンツツが

⑦ ミチダケ ワタシダケ ヤマダケ ソラダケ
 ミチダケワ ワタシダケワ ヤマダケワ ソラダケワ

⑧ ミチヨリ ワタシヨリ ヤマヨリ ソラヨリ
 ミチヨリワ ワタシヨリワ ヤマヨリワ ソラヨリワ

⑨ ミチホド ワタシホド ヤマホド ソラホド
 ミチホドノ ワタシホドノ ヤマホドノ ソラホドノ

さきに(Ⅰ)のような規則を立てたので、今度は④の場合のような、二拍の無核助詞が気になる。ところがこれは東京方言と同じように二つの助詞の間に核が挿入された型となっている。そこで、

(Ⅱ) 無核の二拍助詞に無核の一拍助詞が接続すると、その間に核が挿入される。

という規則も必要になってくる。北九州市方言では、準体助詞・準副体助詞のノはもともと低接式であるから、⑤のような場合には、

(Ⅲ) 無核の助詞に有核の助詞が接続すると、後の助詞の核が実現する。

という規則が必要になってくる。また③④の場合には

(Ⅳ) 有核の助詞に無核の助詞が接続すると、前の助詞の核が実現する。

という規則を立てればよいし、⑦では、
 (Ⅴ) 有核の助詞が連続すると、最初の核のみが実現する。
 という規則を立てればよいだろう。

(2.2) 一拍助詞 + 二拍助詞

⑩ オダケ、ニダケ、エダケ、トダケ (c)の助詞 + (d)の助詞)

⑪ オヨリ、オヤラ、オナリ、オダノ、オトカ、オナド、オコン、オサエ、オデモ、オシカ、ニヨリ、ニヤラ、ニナリ、ニダノ、ニトカ、ニナド、ニコソ、ニサエ、ニデモ、ニシカ、ニヨリ、デヨリ、デヤラ、デナリ、ニダノ、(c)の助詞 + (e)の助詞)

⑫ ノカラ (e)の助詞 + (c)の助詞)

⑬ ノダケ (e)の助詞 + (d)の助詞)

⑭ ノヨリ、ノヤラ、ノナリ、ノダノ、ノトカ、ノホド、ノマデ、ノコソ、ノサエ、ノデモ、ノシカ (e)の助詞 + (e)の助詞)

カセオ ワタシオ ヤマオ アメオ
 カゼオ ワタシオダケ ヤマオダケ アメオダケ
 カセオヨリ ワタシオヨリ ヤマオヨリ アメオヨリ

ワタシノ オバサンノ
 ワタシノカラ オバサンノカラ
 ワタシノダケ オバサンノダケ
 ワタシノヨリ オバサンノヨリ

⑯ ⑭は無核の助詞と有核の助詞との連続で、後の助詞の核が保存されているから、(Ⅲ)の規則が適用される。また⑭は有核の助詞と無核の助詞の連続で、前の核が保存されているから、(Ⅳ)の規則が適用され、⑬、⑭では有核の助詞同士の連続で、前の核が実現しているから、(Ⅴ)の規則が適用される。

⑮、⑯は無核の助詞と有核の助詞との連続で、後の助詞の核が保存されているから、(Ⅲ)の規則が適用される。また⑭は有核の助詞と無核の助詞の連続で、前の核が保存されているから、(Ⅳ)の規則が適用され、⑬、⑭では有核の助詞同士の連続で、前の核が実現しているから、(Ⅴ)の規則が適用される。

[3.1] 一 拍助詞 + 三拍助詞

- ⑮ ニバカリ、デバカリ、トバカリ (c) の助詞 + (d) の助詞)
- ⑯ ニグライ、デグライ、トグライ、ニナンカ、デナンカ、トナンカ、ニナンカ、デナンカ、トナンカ (c) の助詞 + (e) の助詞)
- ⑰ ノバカリ、ノグライ、ノナンカ、ノナンテ (e) の助詞 + (d) の助詞)

- ⑭ ミチニ
ワタシニ ヤミニ ソラニ
- ⑮ ミチニバカリ ワタシニバカリ ヤミニバカリ ソラニバカリ
- ⑯ ミチニグライ ワタシニグライ ヤミニグライ ソラニグライ
- ⑰ ワタシノ オバサンノ
- ⑱ ワタシノバカリ オバサンノバカリ

[3.2] ⑮、⑯は(Ⅳ)の規則が、⑰は(Ⅶ)の規則が適用される。
三拍助詞 + 一拍助詞

- ⑱ バカリが、バカリオ、バカリニ、バカリデ、バカリト、バカリワ (d) の助詞 + (c) の助詞)
- ⑲ バカリノ (d) の助詞 + (e) の助詞)
- ⑳ グライが、グライオ、グライニ、グライデ、グライフ、グライモ、ナンカが、ナンカオ、ナンカニ、ナンカデ、ナンカト、ナンカフ、ナンカモ (e) の助詞 + (c) の助詞)
- ㉑ ナンカノ、グライノ (e) の助詞 + (e) の助詞)
- ㉒ カセバカリ ワタシバカリ ヤマバカリ アメバカリ
- ㉓ カセバカリが ワタシバカリが ヤマバカリが アメバカリが
- ㉔ カセバカリノ ワタシバカリノ ヤマバカリノ アメバカリノ

- ㉒ ミチグライ ワタシグライ ヤミグライ アメグライ
 - ㉓ ミチグライが ワタシグライが ヤミグライが アメグライが
 - ㉔ ミチグライノ ワタシグライノ ヤミグライノ アメグライノ
- ⑳、㉑には(Ⅶ)の規則が適用され、㉒、㉓には(Ⅶ)の規則が適用される。

[3.3] 二拍助詞 + 二拍助詞

- ㉒ ズツヨリ、ズツヤラ、ズツナリ、ズツダノ、ズツトカ、ズツマデ、ズツナド、ズツサエ、ズツデモ、ズツシカ (d) の助詞 + (e) の助詞)
- ㉓ カラダケ (c) の助詞 + (d) の助詞)
- ㉔ カラヨリ、カラナリ、カラダノ、カラトカ、カラアド、カラコン、カラサエ、カラデモ、カラシカ (c) の助詞 + (e) の助詞)
- ㉕ ダケデモ、ダケヨリ (d) の助詞 + (e) の助詞)
- ㉖ ホドマデ、ホドデモ、ホドシカ、マデナド、マデトカ (e) の助詞 + (e) の助詞)

- ㉒ ヒトリヅツ フタリヅツ サンニンヅツ
- ㉓ ヒトリヅツヨリ フタリヅツヨリ サンニンヅツヨリ
- ㉔ ミチカラ ワタシカラ ヤマカラ ソラカラ
- ㉕ ミチカラダケ ワタシカラダケ ヤマカラダケ ソラカラダケ
- ㉖ ミチカラヨリ ワタシカラヨリ ヤマカラヨリ ソラカラヨリ
- ㉗ ミチダケ ワタシダケ ヤマダケ アメダケ
- ㉘ ミチダケデモ ワタシダケデモ ヤマダケデモ アメダケデモ

ミナホド ワタシホド ヤマホド アメホド
 ミナホドマデ ワタシホドマデ ヤマホドマデ アメホドマデ
 (ミナホドマデ ワタシホドマデ)

②、③、④には(四)の規則が適用され、⑤、⑥には(四)の規則が適用される。ところが⑦には問題がある。じつは私自身も(へ)で示した方と⑧とのどちらなのか、覚束ない。上野氏もニ拍助詞の連続する場合のアクセントにゆれのあることを言っておられる(参考文献③)ので、何も北九州方言に限った現象ではなげいらしい。おそらく、このように助詞の連続が日常会話に上ることがさほど多くないためと、フロミネンスをどこに置くかの違いによって、アクセントが一定しなげいらさう。

このうち、ホドマデ、ホドデモ、ホドシカの三つは、助詞ホドの性質によってアクセントの違いが現われると思われる部分もある。この三語が指示語コレ、ソレ、アレに付いた時には、

コレホドマデ、ソレホドマデ、アレホドマデ
 コレホドデモ、ソレホドデモ、アレホドデモ
 コレホドシカ、ソレホドシカ、アレホドシカ

であって、コレホドマデのように絶対にならない。一方ホドが単独でコレ、ソレ、アレに付く時には、

コレホド ソレホド アレホド
 コレホド ソレホド アレホド

と両形があるが、この両形には多少、意味の違いがある。コレホド、ソレホド、アレホドが「コレ、ソレ、アレ」+「ホド(強調)」と

いう風に意識されるのに対して、コレホド、ソレホド、アレホドの方は一語の副詞となっていて、程度を表わしているという意識が強い。

- ① コレホド練習したのにち、ともうまくならん。
- ② コレホド練習したのにち、ともうまくならん。
- ③ コレホドいい物は他にない。
- ④ コレホドいい物は他にない。

この四つの例文のうち⑤は存在しない。⑥が無理なのは、コレホドという語が「コレ」+「ホド(強調)」を表わす(しか表わさない)から、程度を表わすことばを受けようと待ちかまえている「練習した」にはかかることができないからだと考えられる。そうだとすれば、ホドには程度を表わす接尾辞と強調を表わす助詞との二種類があり、この二者はアクセントを異にしていることになる。(副

助詞にはこのようなものも多く、他にも検討を要するものがあるかもしれない)先に見たコレホドマデ、ソレホドマデ、アレホドマデなどの語が、このアクセントでゆれないのも、この場合のホドが助詞ではなく副詞を形づくる接尾辞として働いているからだと考えられる。逆にホドがコレ、ソレ、アレ以外の語に付いた時にゆれが生ずるのは、ホドが接尾辞として働いているのか、助詞として働いているのかという文法段階での違いをそのまま反映したものと思われる。

- (44) 一拍助詞+ニ拍助詞+一拍助詞
- ② オヨリワ、オヨリモ、ニヨリワ、ニヨリモ、トヨリワ、トヨ

リモ、デヨリワ、デヨリモ、ニマデワ、ニマデモ、ニナドワ、ニアドモ、トナドワ、トナドモ、ニトカワ、ニトカモ、ニコソワ、ニサエモ、デサエモ (c) の助詞 + (e) の助詞 + (c) の助詞

②⑧ ノヨリワ、ノヨリモ、ノホドワ、ノホドモ、ノマデワ、ノマデモ、ノナドワ、ノナドモ、ノナドガ、ノトヤワ、ノトカモ、ノユソワ、ノサエモ (e) の助詞 + (e) の助詞 + (c) の助詞

②⑦

ミチオ	ワタシオ	ヤマニ	ソラニ
ミチオヨリワ	ワタシオヨリワ	ヤマニヨリワ	ソラニヨリワ
ワタシノ	オバサンノ		
ワタシノヨリワ	オバサンノヨリワ		

②⑧ 接続する助詞が三つになつても、さきの (c) (v) の規則で処置とすることができる。②⑦は (a) と (a) の規則の適用、②⑧は (a) と (a) の規則の適用である。

(3.5) ニ拍助詞十一拍助詞十一拍助詞

②⑨ カラデワ (カラジャヤー) (c) の助詞 + (c) の助詞 + (c) の助詞

ミチカラ	ワタシカラ	ヤマカラ	ソラカラ
ミチカラデワ	ワタシカラデワ	ヤマカラデワ	ソラカラデワ

これは (a) の規則と (a) の規則との適用とも考えられるが、後の二つの助詞が融合して「カラジャヤー」となることを考えるなら、まず後の二つに (a) の規則が適用されてデワ (ジャヤー) が低接式の助詞となつた時点で (a) の規則が適用されたと考えた方がいいだろう。

以下、助詞が連続して五拍の連接助詞を作る場合もあるが、この

時も先の (c) (v) の規則で処理できるので省略させていた。ただひとつ取りあげておかげければならないのは、次のような場合である。

②⑩ カラデサエ (c) の助詞 + (c) の助詞 + (e) の助詞

ミチカラ	ワタシカラ	ヤマカラ
ミチカラデサエ	ワタシカラデサエ	ヤマカラデサエ

これは、先に (a) の規則を適用してカラデという型を作つておいて、次に (a) の規則を適用すると右のようなアクセントになるが、逆に、先に (a) の規則を適用してデサエという型を作つて次にまた (a) の規則を適用すると、右のようなアクセントにはならず、

ミチカラデサエ ワタシカラデサエ

のような、北九州市方言ではあり得ない型になつてしまう。つまりカラデサエという助詞の構造が「カラ+デサエ」ではなくて「カラデ+サエ」であるということを、アクセントが表わしていると考えられる。

助詞が接続する時のアクセントを、(c) (v) の規則を立てて見てもきたが、じつはその前に、もう一つ重要なものを入れなければならなかつた。それは、

(A) 後にいくつ助詞が接続しても、第一番目の助詞の式 (接尾辞式、従属式、低接式) は保存される。

という規則である。助動詞には方言によつては、前の助動詞の式を無効にし、後を「引寄せ接辞」もあるということだが、北九州市

方言の場合は東京方言と同じように、助詞でも助動詞でもアクセント核の「引寄せ」は見られない。ただし、(I)は(A)の規則の例外となる。(A)も含めて、北九州市方言で助詞が接続する時の規則を、もう一度ここに示してみよう。

(A) 後にいくつ助詞が接続しても、第一番目の助詞の式(接尾辞式、従属式、低接式)は保存される。

(I) ただし(A)の例外として、無核の一拍助詞に一拍助詞が接続すると、前の無核の助詞は直前に核を持つ型に変わる。

(II) 無核の二拍以上の助詞に無核の助詞が接続すると、その間に核が挿入される。

(III) 無核の助詞に有核の助詞が接続すると、後の助詞の核が実現する。

(IV) 有核の助詞に無核の助詞が接続すると、前の助詞の核が実現する。

(V) 有核の助詞が連続すると、最初の核のみが実現する。

四

前章でいちばん問題とがするのは、規則(I)だろう。東京方言や松江方言などでは(O)の規則ひとつですむところを、北九州市方言では規則(I)が変則的のため、規則(I)と規則(II)の二つの規則が必要となっている。北九州市方言の規則(I)は、どういう意味を持つのか。

それはおそらく、前章の最初に書いたような、助詞の基本型というものと深く関係していると思われる。北九州市方言では、二章で

書いたように、二拍助詞はそのほとんどが低接式(e)式で、助詞自身が核を持つ(a)式の多い東京方言と大きな違いを見せている。このため、「ニワ、デワ……」の類もそれに引かれて低接式となっただろう。このことは、「ニワ、デワ……」の類が二つの助詞の連続したものに過ぎない、すでに二つの部分に切り離すことのできない、二拍の助詞として働いていることを示している。東京方言で「ニワ、デワ……」の類が規則(O)によって「ニワ、デワ……」となるのは、二拍助詞の基本型が東京方言で「O」型であるということと、やはり関係があるだろう。東京方言でも、基本型に合わせる形で「ニワ、デワ……」のアクセントがおちついている。

一方、同じ無核の助詞の接続でも、「カラが、カラニ……」の類に比べると、北九州市方言も東京方言と同じように、二つの助詞の間に核が挿入されている。これは、「カラが、カラニ……」の類が「ニワ、デワ……」の類と違って、三拍の助詞としては働いていないからだろう。ちなみに、三拍助詞の基本型は、北九州市方言で低接式(O)と見てよいだろうが、「カラが、カラニ……」の類も完全に一語の三拍助詞と意識された時には、この型になるものと思われる。ワタシカラフのような発音を全く聞かないわけでもない。

また、この時、東京方言でも北九州市方言でも、二つの助詞の間に核が挿入される——後の「ガ、オ、ニ、デ、ワ、モ」の直前に核が挿入される——のは、これらの助詞が名詞に接続する時には従属式接続でも、動詞に接続する時には低接式となるという事実と関係があるだろう(注3参照)。つまり「ガ、オ、ニ、デ、ワ、モ」等

の助詞は、文節の上位に位置すれば無核の従属式接続の助詞であるが、文節末尾に位置すると低接式になるという性質をもとと持っているのである。他の助詞に下接するということは、動詞に接続する場合と同じく、文節末尾に位置することを意味している。

その他、問題点はまだあるが、この辺で終えることにしたい。このように助詞の連続する場合のアクセントが明かになれば、日常会話により近い形の資料が得られるわけだし、また助詞の性格も明かになる部分が多いと思っている。

注

- (1) 参考文献②、③、④に負うところが大きい。
- (2) 従属式、低接式などの用語については、二章参照のこと。
- (3) 東京方言で例をあげると
 - (名詞) カセヨリ
 - (動詞) イカヨリ
 - (助詞) フタシノヨリ
 のように違いがある。
- (4) 参考文献④参照。参考文献⑤の437ページ、437ページなどによると、平曲でもこのような傾向が見られるという。
- (5) 参考文献②による。

参考文献

- ① 拙稿「北九州方言のアクセント——助詞・助動詞——」(『純真紀要』21号 昭和55年12月)
- ② 早田輝洋氏「大分県臼杵市方言のアクセント——用言の活用を中心にして——」(『長谷川松治教授古稀記念論文集』 昭和56年12月)
- ③ 上野善道氏「松江市方言のアクセント——付属語を中心に——」(『金沢大学日本海地域研究所報告』第13号 昭和56年11月)
- ④ 上野善道氏「富山県氷見市方言のアクセント」(『日本海文化』第9号 昭和57年3月)
- ⑤ 奥村三雄氏「平曲譜本の研究」(桜楓社 昭和56年5月)
- ⑥ 奥村三雄氏「辞の形態論的性格」(『国語国文』28・9 昭和

—— 純真女子短期大学講師 ——